

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

# 学位論文審査報告書

## 審査委員

審査委員長

小川裕子

委員

村越真

委員

稲葉みどり

委員

石川恭

委員

古田真司

委員

委員

審査期間 令和2年5月1日 から 令和2年7月13日

## 審査論文

保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 名倉 一美

生年月日 昭和51年2月9日

提出日 令和2年5月12日

保育者不足が深刻化する現代において、一方で、その保育の質をどのように保証するかが課題となっている。これまでの保育実践の研究では、その質の評価に統一的な基準がなく、専ら論文の執筆者や保育者自身の主観的な評価によって語られることが多かった。

本研究で著者は、保育施設に通う幼児が自らの所属する集団に「居場所」があると感じる「集団所属感」をその保育の質の評価として用いることができるかどうかを、いくつかの研究を積み上げて検討し、その集団所属感を評価するための2つのアセスメントツールを開発した。1つは幼児に対して口頭で直接質問してその回答から所属感を評価するもの、もう一つは、保育者が幼児の行動を観察することで、その時点でのそれぞれの幼児の集団所属感を客観的に評価できる保育者観察用のツールである。これらは、幼児や保育者へのインタビューや記録された保育実践のビデオ映像に関する詳細な分析を通じて、緻密に積み上げられた理論と、保育現場の実態をよく知る著者ならではの視点で、まったく新しく考案されたツール群である。

本論文は序論、本論、結論からなり、本論は5つの研究で構成されている。序論では、これまでの保育実践の評価の問題点と、それを客観的に評価するために「集団所属感」を利用する意義、さらにそのアセスメントツールの開発の必要性を論じている。本論では、まず第1章で、これまで公表されている保育実践報告の分析から、4つの共通した概念を見出し、そのうちの2つが集団所属感に関連することを明らかにした。第2章では実際の保育場面のビデオによる分析から、集団所属感につながる「幼児同士をつなぐ保育者の援助行動」を抽出した。第3章では、幼児への口頭質問によるアセスメントが可能かどうかを検証している。あらかじめ複数の質問を準備して、その回答と保育者や他の幼児からの評価との関連を検討することで、アセスメントに有効な3つの質問を見出した。第4章は他園から転入してきた幼児の集団所属感の獲得の経緯を経時的に分析することで、対象児が他児との関わり行動をどう変化させたかを詳細にまとめた。この記録から、集団所属感の獲得状況(段階)を表す具体的な「行動」を列挙することで、保育者が自ら幼児の現状を把握するためにアセスメントツールの開発を試みた。第5章では、第4章で開発されたツールの妥当性を確認するために、第4章の対象であった幼児に関わった2名の保育者に対するインタビュー調査とその質的分析を行い、概ね同様の概念が抽出されることを確認した。結論の章では、これらの研究を総括して今後の課題を述べた。

本論文の独創性は、これまで難しいとされてきた保育の質の客観的な評価に、正面から挑んで一定の成果をあげた点にある。特に保育の対象者である幼児自身に口頭による質問を行って、そこから簡便なアセスメントツールを開発したこと、今後の保育の質を担保するために、幼児の集団所属感の獲得段階を保育者自身でチェックできる観察ポイントを盛り込んだアセスメントツールを開発したことなどは、著者の長年の保育現場と保育者養成の経験を活かしたものであり、教科開発学の論文に値すると思われる。

以上より、本論文は博士(教育学)の学位を授与するのにふさわしい内容であると認める。

(課程博士・様式11)

最終試験の結果の要旨及び審査委員 報告書

学籍番号	213D002	氏名	名倉 一美
論文題目	保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発		
論文審査結果	合		
最終試験結果	合		
最終試験 審査委員	審査委員長 小川 裕子 委員 村 越 真 委員 榎 栗 みどり 委員 石 川 恭 委員 石 田 真司		

(最終試験の結果の要旨、1,000字程度)

最終試験は30分の研究内容の発表と、約1時間の審査委員との質疑応答によって行われた。発表では、論文の概要が序論、本論(第1章から第5章)、結論の順で説明された。全体を通して、保育現場をよく知る著者ならではの視点が随所に盛り込まれており、特に研究の枠組みやその意味について、詳しく説明がなされた。

続いて行われた質疑応答では、次のような質問が委員からなされた。1) 保育の最低限の質保証という観点のアセスメントが他にないのか、あるならそれとの違いは何か、2) 2種類のアセスメントのうち保育者自らが行うアセスメントの客観性について、3) 集団所属感と「適応感」との違いは何か、4) ツールの作成に海外の文献をどのように活かしているか、5) アセスメントツールの「アセスメント」の意味とそれを幼児に使う際の注意点、6) 質的分析(SCAT分析)の信頼性について、7) 論文で詳しく述べられていない研究方法の詳細について、8) 5章で述べられている「信頼性」と「妥当性」の違い、などであった。いずれの質問に対しても概ね適確に回答し、また、今後の課題とすべき点を述べることができ、自らの論文の研究内容について深い理解があることが確認できた。

以上の点および別紙の「審査概評」で述べた点を合わせて、最終試験の結果は「合」と判定した。

審査委員長 小川 裕子 印